Hit 動詞の交替形とその意味的基盤について

梅 原 大 輔

Semantic Bases for Some Alternations in Hit Verbs

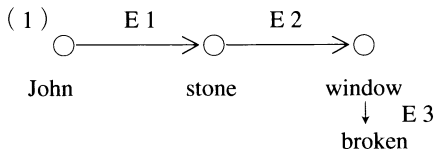
UMEHARA Daisuke

Abstract : This paper investigates the semantic bases which cause some alternation patterns in English hit verbs. Two types of alternations which characterize this verb group are focused on. So-called "with/against alternations" (Levin 1993) which are assumed to be unique to this verb group can be attributed to a cluster of semantic features, including lack of end-state specification, concurrentness of two sub-events, and lack of manner modification. Conative alternations imply that the intended event has not been completed, but is half-way through, and can be observed with the verbs compatible with these features.

1 事象の連鎖と言語表現の制約

外界で発生する事象（event）はしばしば因果関係の連鎖を形成する。例えば，John が石を投げたところ，それが窓に当たって窓が割れた，という事象を考えてみよう。この事象に関与しているのは，John，石，窓の三つである。これらは順々に力を伝え合い，最終的に窓が割れるという結果状態をもって事象が終結する。こういった事象の連鎖を，次のようなモデルで図示することができる。(cf. Croft 1991, Langacker 1991)

（1）



事象に関与しているものを○で表し，最後の broken は結果状態である。事象には連鎖の順に E 1, E 2, E 3 と番号をつけておく。ここでは，John がまず石に対して力を加え（E 1），石が窓に向かって飛んでいって当たる（E 2）。そしてその結果，窓が割れるという状態になる（E 3）のである。

この一連の事象を言語化することを考えよう。動詞 *break* は E 3 に言及し，状態変化が成立したことを含意する。ただし，その結果に連なる要素をどれだけ表すかによって，複数の表現形式が可能になる。

（2）a. John broke the window with a stone.
b. A stone broke the window.
c. The window broke.

しかしながら，この一連の事象を思うように表現できない場合もある。例えば，E 1 は John が石を投げる事象を表しているが，動詞 *throw* によって E 3 の結果状態まで表現することはできない。

（3）*John threw a stone against/at/to the window broken.

一般的に言って，ある事象 En を指す動詞で表現できるのは，連鎖上の次の事象 En＋1 までであり，二つ先の事象まで一気に表現することはできない。これは自然言語に関わる制約であると考えられる。ここから一般的に，直接目的語として実現する項にしか結果状態の表現を付け加えることはできない，ということが帰結する。

Break と *throw* の区別に見るように，動詞の種類によって，同じ一連の事象のどの部分を表現できるかと

いう点に違いがある。そして，一つの動詞でもいくつかの異なる方法で一連の事象に焦点を当てることができる。一つの動詞が項の文法関係を変えて，違う表層形式の文を許すことを交替現象（alternations）と呼ぶ。上の *break* の例では，*the window* が目的語として実現したり（a, b），主語として実現したり（c）している。また（b）では道具の *a stone* が主語として実現している。

Levin（1993）は，動詞が取る交替形をもとにして英語の動詞群を詳細に分類した極めて重要な研究成果である。彼女は大分類だけでも50近くの動詞群を認定し，更に一つの動詞群の下に，多い場合には10に及ぶ下位分類をしている。このような膨大な分類の中では，一つの動詞が一つの場所だけに収まっているわけではない。中には一つの動詞が10近くの分類にまたがって顔を出していることもある。逆に一つの動詞群に属する動詞だからと言って，全てが同じ振る舞いをするわけでもない。動詞群Aに属するある動詞が別の動詞群Bにも属するということがあるが，だからと言ってAに属する全ての動詞がBにも属するということはない。動詞は，互いに部分的な共通性を持ちながら，複雑な意味のネットワークを作っているのである。

本稿では，ある動詞群が特定の交替形を認めるかどうかは，その動詞群の意味的特徴が影響している，という作業仮説を立てる。そして一つの例として，*hit* 動詞を取り上げ，この動詞群が示す代表的な交替形が，どのような意味特徴によるものなのかを，他の動詞群と比較しながら説明していく。

2　Hit 動詞に関係する交替形

Levin（1993）の分類では，*hit* 動詞に分類されている語は次の24語である。これらの動詞はいずれも，「強い勢いで何かを動かして対象に打撃を加える」，という意味を持っている。

（4）Hit Verbs
bang, bash, batter, beat, bump, butt, dash, drum, hammer, hit, kick, knock, lash, pound, rap, slap, smack, smash, strike, tamp, tap, thump, thwack, whack

Hit 動詞が取る交替形として特徴的なものに，*with/against* 交替と呼ばれるものがある。この交替では，*hit* 動詞は動作主と被動作主の他に，道具を表す句を項として取る。そして被動作主と道具のいずれかを直接目的語に，もう一方を前置詞句の中に置く形で交替する。Levin によると，*hit* 動詞はこの交替形を許す唯一の動詞群である。

（5）*With/Against* 交替
a. Paula hit the fence with the stick.
b. Paula hit the stick against the fence.
（Levin 1993）

この二つの交替形は共に，Paula が棒を持って柵を打っている，という事象を表しているが，両者の含意関係は同じではない。(5 a)の *with* 構文は Paula hit the fence. を含意しているが，(5 b)の *against* 構文は Paula hit the stick. を含意していない。言い換えれば，(5 b) の *stick* は打撃の対象ではなく，道具として解釈される要素である。

この含意関係の違いが見られない場合は，表面上類似していても *with/against* 交替とは考えないのが普通である。例えば次は *break* を使った例である。

（6）a. John broke the fence with the stick.
b. John broke the stick against the fence.

一見，*with/against* 交替に似ているが，この二つの文では表現されている事象に違いがある。すなわち，(6 a) では break という行為によって状態変化を受けている（つまり破壊されている）のは柵だが，(6 b) で状態変化を受けているのは棒の方である。つまり，*hit* の場合とは異なり，*against* を使った（6 b）でも John broke the stick が含意されているのである。

一般に，交替現象において，交替する二つの文が表す認知的な意味は等しいという前提がある。そのような前提からすれば，(6) は確かに交替形の例と考えるべきではない。しかし，交替形の認知的意味が同じだといっても，二つの文が完全に同義であるということはない。例えば，代表的な交替形として知られている場所格交替の例を見よう。

（7）a. John loaded the hay onto the wagon.
b. John loaded the wagon with the hay.

いずれの文においても，干草が荷車の上に移動したという状況に変わりはない。しかし，(7 a) では，特定

されている干草が全て荷車に乗せられたが，荷車が一杯になったかどうかはわからないのに対し，(7 b) では荷車が一杯になったが干草が全部積まれたかどうかはわからない，という違いがある。直接目的語は事象による影響を直接に受けるため，「全体的影響」という解釈が生じるのである。

これをもって (6) を見直すと，この二文の意味の違いは，*break* という結果状態を含意する動詞がそれぞれの目的語に影響を与え，その結果状態を表すことから来ると考えられる。(6) でも (7) でも動詞は目的語に影響を与えているが，(7) は状態変化を含意しないため交替形と認定されていることになる。

また (5) の含意関係についても，同じ *hit* 動詞である *kick* の例を見ると，事情が違っていることがわかる。

(8) a. John kicked his left foot against the fence.
　　b. John kicked the fence with his left foot.

これは明らかに *with/against* 交替の例と考えられる。しかし，(8 a) は John kicked his left foot. を含意しないだろうか。確かに，打撃を与えるという意味の *kick* としてはこの含意は成立しない。しかし，John kicked his left foot. という文自体は「足を蹴りだす」という意味の *kick* として可能な文である。そしてその意味では，(8 a) は John kicked his left foot. を含意しているのである。次はこのような意味の kick の例である。

(9) . . . my 6 yr old son was dancing around in a pair of boots that were too big. *He kicked his leg* and the boot flew off and hit my daughter just above the eye. This required 13 stitches.
(http : //www.join-hands.com/forum/messages/1914.html)

従って，ここでの含意関係の問題は，*hit* が「手に持ったものを動かす」という意味の動詞として単独で使うことができないのに対し，*kick* は「足を動かす」という *crane* 動詞の一種としても使える，という点にあるのだろう。そこで以下の節では，*with/against* 構文の認定に関して，この含意関係の違いは本質的な問題ではないと考えることにする。

Hit 動詞が取る交替形としてもう一つ顕著なものは，動能交替 (conative alternation) と呼ばれるものである。動能交替は，他動詞の直接目的語を前置詞 *at* の目的語に交替させる次のような現象である。前置詞を介在させた (9 b) の形を動能構文 (conative construction) と呼び，(9 a) の他動詞文と区別する。

(10) 動能交替
　　a. Paula hit the fence (with a stick).
　　b. Paula hit at the fence (with a stick).
　　(Levin 1993)

Hit 動詞は本来，行為の及ぶ対象が存在することを前提する他動詞と考えられるが，動能構文にすると，動詞が表す行為が対象に達しなかったという意味を持つ。上の例では，(10 a) が Paula の振りおろした棒が柵に当たったことを述べているのに対して，(10 b) では当たらなかったという解釈が生じる。

動能交替を許す動詞は *hit* 動詞に限らない。他に，*cut, push* のグループに属する動詞でも可能である。その他の動詞，例えば *break, move* などは，「～しようとした」という解釈があってもよさそうなものだが，動能構文では使えない。

(11) a.* John broke at the window.
　　b.* John moved at the table.

Levin (1993) は，こういった交替形について，*with/against* 交替を取る動詞は，＋motion，＋contact，- effect の意味を持つものに限られる，と述べている。Guerssel et al. (1985) は，英語と Warlpiri 語のデータをもとにして，動能交替を許すのは，effect と contact の両方の意味を持った動詞に限られる，と述べている (p. 59)。また Pinker (1989) は，英語のデータをもとに，＋motion，＋contact の動詞が動能交替を許すとしている (pp. 104–105)。

動能交替や *with/against* 交替の条件になるこういった意味特徴は，*hit* や *cut* のような動詞群を *break, move, touch* といった動詞群から区別しているが，なぜこのような意味特徴があれば交替が生じるのかを十分に説明していない。次節以下では，この二つの交替形を取り上げ，どのような意味的基盤を持った動詞群がこれらの交替形を許すのか，再考してみたい。

3　*With/Against* 交替の制約

With/Against 交替には＋motion や＋contact といった

素性が関係しているという考えがあると述べた。つまり *hit* 動詞は「動作主が何らかの道具を動かし（motion），それによって，道具を対象に接触させる（contact）」という意味を持っており，これが交替形の原因になっていると見られているのである。ここで，*hit* 動詞の例として *kick* の *with/against* 交替を取り上げる。

先に述べたように，*kick* は「足を動かす」という motion の部分だけで独立して使うことができる。これは「体の一部を動かす」という *crane* 動詞としての kick と同じであり，「足」はこの行為の対象となる「体の一部」である。この項を明示せずに自動詞として用いても足を動かしていることが含意される。

（12）This morning Haley came out to say hello and that she was going to be around all day, but Jet wouldn't listen, at all, and finally Joan just carried him into the house with her. *He was kicking* and screaming and everything.
（http : //www.flick.com/~liralen/journal/daily/sep03/05.html）

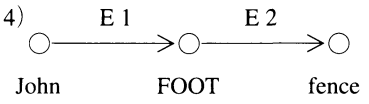
全ての *crane* 動詞が *hit* 動詞として使えるわけではないが，*kick* のように外向けの力を放出するような語の場合，*hit* 動詞に解釈できると考えられる。この *kick* は先に見たように *with/against* 交替を示す。（8を再掲）

（8）a. John kicked his left foot against the fence.
　　b. John kicked the fence with his left foot.

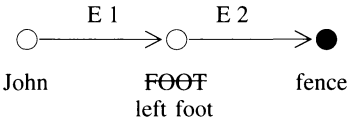
足（あるいは足の一部，あるいは足に装着する用具）以外の語は *kick* の道具として解釈できない。例えば，次のように *ball* を伴った文では *with/against* 交替をしない。要するに蹴ったボールが柵に当たっても，「柵を蹴った」とは言えないからである。

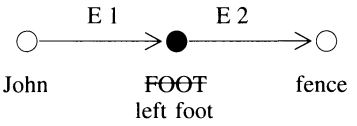
（13）a. John kicked the ball against the fence.
　　b.* John kicked the fence with the ball.

そこで「打撃」の *kick* の意味を「動作主が足を動かし，それによって足を対象に接触させる」という二つの事象からなるとして，次のように図示しよう。大文字の FOOT はデフォルトの意味で，必要に応じてこれと同一視できる明示的な表現に置き換えられるものとする。

（14）


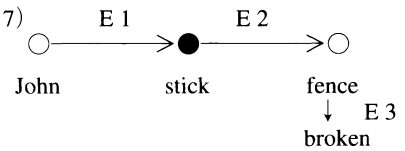
事象 E 1 だけを見ているときは，FOOT はその事象の直接の対象（Gruber/Jackendoff の意味での theme）であり，E 2 に注目すると FOOT は道具として働いている。今，目的語として実現している要素には焦点が当たっていると考え，それを●によって表す。（12 a, b）の二つの文の違いは，焦点の違いとして次のように表すことができる。

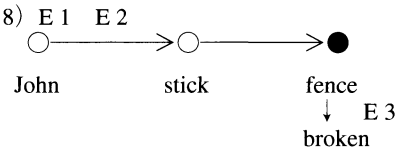
（15）（＝12 a）


（16）（＝12 b）


With/Against 交替をするということは，E 1 と E 2 を同じ *kick* という動詞で表せることを意味している。これはどのような場合に可能なのだろうか。

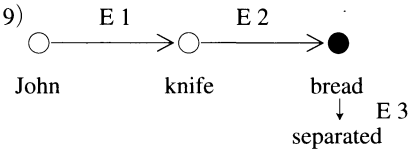
最初に言えることは，結果状態を含意する動詞はこの交替に馴染まないということである。この交替の中では道具を直接目的語にする必要がある。一般に結果状態を含意する動詞は道具を直接目的語に取れないはずである。なぜなら，道具を目的語にすれば，その道具が働きかける対象の結果状態を表そうとする時に，「二つ先」の事象に言及することになり，これは（3）で見たように一般的に不可能だからである。結果状態を含意する動詞が道具を直接目的語に取ろうとすると，必然的に道具に状態変化を与える解釈しか出なくなってしまう。先の *break* の例はそれを示している。

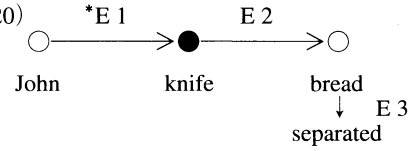
（17）


(18)


これは，John opened the door with the key. と言えても，John opened the key... という形ができないのと同じである。結果状態を含意する動詞が道具を項に取ろうとするなら，道具主語の形しか可能性はないのだと言える。

Cut も結果状態を指定する点で *break* と同じである。*Cut* は＋motion，＋contact という素性を *kick* と共有するが，結果状態の含意関係が発生するため，*with /against* 交替をしない。

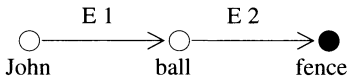
(19)


(20)


Cut の場合には *break* と違って，道具（＝SHARP EDGE）についての指定をする。しかし結果状態をも表す必要があるために，道具を目的語にした交替形を作ることができないのだと言える。

With/Against 構文は，道具に対する働きかけがそのまま対象に対する働きかけを表している。このため，motion と contact の二つの事象が何らかの意味で「一体に」なっている必要がある。この交替を取らない *throw* の例を見よう。この場合問題となるのは，*with* 構文の方である。

(21) *John threw the fence with the ball.



Throw は，対象物に力を加えることでそれが空中を移動することを表す。対象物が一旦動き始めれば，それは動作主の意思によって制御できない動きである。従って，上の E 2 の部分は E 1 と一体になった事象ではなく，位置変化を表す結果状態の事象であると考えられる。*With/Against* 交替が可能になるためには，二つの事象が一体のものであると認識できる必要がある。そのためには E 1 と E 2 が同じ動作主を持つことが必要になる。前掲（13）の例で交替形が成立しないのも同じ理由による。ここで使われている *kick* は *throw* 動詞としての *kick* だからである。

Throw と非常によく似ているが違う振る舞いを見せる例として *shoot* を取り上げよう。*Shoot* は道具である銃と行為の対象の両方を目的語に取ることができる。*Against* による交替はしないが，*at* を使った次の例も一種の *with/against* 交替だと考えられるだろう。

(22) a. John shot the gun at the enemy.
　　 b. John shot the enemy with the gun.

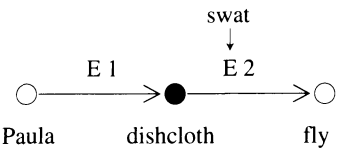
現実には，銃から発射された弾丸は，投げられたボールと同じように制御のできない移動体である。しかし（22 b）が可能なのは，E 1 と E 2 の両方を動作主による一体の行為として認識できるためだと考えられる。Levin（1993）は，*shoot* を *swat* 動詞という打撃動詞の下位分類に含め，この動詞群は *with/against* 交替をしないとしている。しかし，（22）の例は *with/against* 構文の特徴を備えたものである。ただしこの場合，「銃を操作する」という E 1 の部分を motion という素性でとらえるのは難しいと考える。特殊な例ではあるが，銃自体が enemy に向かって移動するわけではないからである。

Shoot 以外の *swat* 動詞がなぜこの交替を示さないのかを考えよう。Levin の説明では，*swat* 動詞は motion と contact を表すが結果は含意しない。これは *hit* 動詞と同じで *with/against* 構文の成立条件のはずだからだ。

(23) a.* Paula swatted the dishcloth against/on the fly.
　　 b. Paula swatted the fly with the dishcloth.

一つ考えられるのは，*swat* 動詞は *hit* 動詞と異なって，様態に関する含意を持っていることである。*Swat* には「ぴしゃりと叩く」という E 2 の contact を修飾する様態を含んでいる。これがあるために，*with/against* 交替の条件である E 1 と E 2 の同一性が保持できなくなるのである。

(24)



これと同じことは，打撃動詞のもう一つのグループである *spank* 動詞についても言える。次の例に見るように，*spank* も motion と contact の意味を持ち，結果を含意しないにも関わらず，*with/against* 交替をしない。

(25) a.* Paula spanked her right hand against the naughty child.
　　b. Paula spanked the naughty child with her right hand.

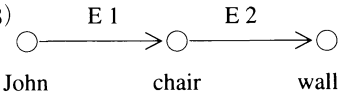
以上の内容を再確認すると次のようにまとめることができる。

(26) *With/Against* 交替の成立
一連の事象 E 1，E 2 を表す動詞が *with/against* 交替をするのは次の場合である。
i）結果を含意しない動詞であること。
ii）E 1，E 2 が同じ動作主を持つ一体の事象と考えられること。
iii）様態による修飾を含意しないこと。

以上の条件を満たすが打撃動詞ではないものとして，*push* を取り上げ，この提案の妥当性を確認しよう。次の例に見るように，*push* は *with/against* 交替を許すように見える。

(27) a. John pushed the chair against the wall.
　　b. John pushed the wall with the chair.

(28)



(28) の事象が表しているのは，E 1 と E 2 が一体となった「押す」行為である。また *push* という動詞は特定の結果や様態の修飾を含意しない。*Push* は打撃動詞ではなく，motion の意味も含まないと考えられるが，(28) の交替は *hit* 動詞に見られる交替と同じものと考えられるのである。(27 a) は John pushed the chair. を含意するが，この含意関係があることだけで *with/against* 交替からはずすべきでないというのは，先の *kick* の場合と同じである。

Hit 動詞は体の一部または体と密着した道具を用いて別の対象に働きかける。このため道具を使うことと対象に働きかけることが一体と認識できる特徴を持つ。また対象の結果状態を含意しないことから，道具目的語と共起できるという特性を持つ。このようなことが with/against 構文を許す意味的基盤になっていると考えられる。

4　動能交替再考

続いて，*hit* 動詞と結び付けられるもう一つの交替形である動能交替に目を向ける。これまでも見てきたように，*hit* 動詞は結果状態を含意しないが，*cut* 動詞は結果状態を含意する。*Cut* という行為はそれが対象に及んだ結果，最終的に対象が切断され分離した状態で終結する。少なくとも英語では，cut the bread という行為が成り立ったと言うためには，パンが切断されていなければならない。結果状態を指定する行為であれば，結果状態を見ればどのような行為が起こったのか逆に推測できる。日本語の「テアル」構文は結果状態を指定する動詞としか共起しないとされる。

(29) a.? ドアが蹴ってある。
　　b. 羊羹が切ってある。

要するに，蹴られたドアを見ても蹴るという行為からの結果状態が見えないのに対して，切られた羊羹を見れば切るという行為の結果であることがわかるということである。

このように *kick* と *cut* で結果状態の指定に違いがあるということは，両者に共通する動能構文の原因を結果性に求めることはできない，ということになる。Pinker が動能構文の成立条件として挙げる＋motion，＋contact はこのことを表している。しかし直感的に考えて，動能構文が表しているのは，意図した行為を遂げることができていない，という状況である。にもかかわらず，この構文の成立に，動詞が持つ，motion や contact という意味がなぜ関係しているのか，再考する必要があると思われる。また，前節と同じく，*push* 動詞が動能交替を許すということは，motion という素性に帰することの問題となるだろう。

動能構文は，目的語に行為が及ばないことを意味するとされる。例えば *kick at*～という文は，「～を蹴ろ

うとしたが当たらない」という未遂の状況を表す。次はそのような例である。

(30) I put my hands under his arm pits and lifted him helplessly off the floor. *He was kicking at me* but his legs didn't even reach me.
(http : //mgs.digital–empire.net/mgs/stories/view.asp?StoryID＝164)

しかし，動能構文でも必ずしも行為が対象に及ばないわけではない。次の例では，明らかに，かなり強い力が対象に及んでいることがわかる。

(31) Suddenly the radio went dead. The lights blinked off. The cyclone was headed our way now. All felt a sense of unease. The wind rose to a howl and the trees swayed violently. Went inside the house, closed the door. The latch rattled noisily, as if *some giant was kicking at the door with all his strength*. So we wedged the beds there. And waited. We could not sleep. Not that we were afraid of anything, but... we had never seen anything like this.
(http : //cyberabad.hypermart.net/cyclone.htm)

この文章で比喩的に表されている kicking は反復的で，留め金が大きな音をたてるほど強力なものである。従って kicking という行為がドアに及んでいないと言うことはできない。しかし，この "giant" が最終的にドアを破壊する，という結果には至っていないということは，動能構文を使うことによって表現されている。

また次の例では，子供たちがボールを蹴りながら遊んでいる様子が描写されている。この場合も，子供たちは誰もボールを蹴ることができずにいると解釈することはできない。むしろ互いにボールを蹴りあっているために，一人の子供だけがボールの動きを支配しているのではない，という意味で，意図した結果が得られていないことを示している。

(32) As he sat reading, three barefoot boys ran from an alley *kicking at a ball*, their laughter filling the street, sweat gleaming in the gaunt furrows of their backs. He winced at the collisions of their dark, bony shins. The ball shot past the porch rail and bounced off the wall behind him.
(http : //www.stwa.net/tsg/puerto.htm)

以上から言えることは，*kick at*～という表現が表しているのは，対象との接触がなかったということではなく，行為による影響を対象が受けなかった，ということだとわかる。先にも見たように，前置詞の目的語になっている句に対して更に結果状態を表す表現を付け加えることは「二つ先」を表すことになり許されないからである。

(33) a.* The giant kicked at the door open.
b. The giant kicked the door open.

先に *kick* は対象の結果状態を含意しないと述べた。しかしこれは結果状態を表現できないということではない。むしろ特定の結果状態が指定されていないため，明示的に結果状態を付け加えることが可能である。直接目的語として実現している項は，そのような結果状態の指定を受ける可能性があることを意味している。Kick という行為は，対象が何らかの変化を被るに十分な打撃を与える強い行為である。この対象は，位置変化，状態変化の両方を受ける可能性があることがわかる。

(34) a. John kicked the ball into the yard.（位置変化）
b. John kicked the door open.（状態変化）

位置変化をもたらす（34 a）の *kick* は *throw* 動詞に属するものである。同時にこのような *kick* は *carry* 動詞の可能性もある。一度蹴った後，動作主による制御が不能になり，ボールが勝手に移動するという事象が *throw* 動詞の表す事象だとすれば，着点までボールを制御しながら移動させる，という制御可能性を持った事象が *carry* 動詞の表す事象である。

Kick は「足」を直接目的語にして *crane* 動詞の働きをすることもできるが，この場合でも，目的語である足について，位置変化または状態変化を付け加えることができる。

(35) John kicked his leg out.（位置変化）

(36) With outstanding freshman placekicker Brennan O'Donohoe just watching because O'Donohoe has overdone in practice and *kicked his leg sore*,

Swartz showed he's very much in the placekicking picture.（状態変化）

面白いのは，対象に影響が及ばない代わりに，動作を行った側が変化を被る場合があることだ。特に前置詞として *against* が用いられる場合，行為の影響を跳ね返しているという意味がある。次の例で，*kick* という行為によって移動しているのは *his feet* およびそれを所有している主語の *he* であって，木の方は静止しているのである。

(37) He *kicked his feet against the trunk* and climbed the tree.

動能構文を使うということは，直接目的語が取りうるこのような結果状態を含意しない，と主張していることになるのである。

但し，結果状態を含意しないことを主張する，だけでは動能構文を正しく説明したことにはならない。動能構文が成立するためには，「少なくともその行為の一部は成立した」ということを同時に表さなければならないように見えるからである。

(38) John kicked at the door.
「影響を与えてはないが，ドアに足は当たっている」

または「ドアに足は当たっていないが，足を動かしてはいる」

(39) John pushed at the cart.
「荷車の移動には至っていないが，力を加えてはいる」

このような〈部分的な成立〉がなければ，そもそもその行為をしようとしているとは判断できない。

(40) *John touched at the wall.
「壁に触れるには至っていないが，？？？」

(41) *John threw at the ball.
「ボールを投げるには至っていないが，？？？」

共に結果状態を指定する *cut* と *break* の違いも同じ説明ができる。いずれも結果状態を含意しているにもかかわらず，*cut* には動能交替が許されるというのは大きな問題だからである。

(42) John cut at the bread.
「パンの切断には至っていないが，刃物を押し付けている」

(43) *John broke at the window.
「窓を割るには至っていないが，？？？」

つまり *cut* は「刃物を使って」という指定があるため，刃物と対象物があれば，未完の *cut* という状況を作ることができる。しかし，*break* にはそのような指定がないため，窓だけがあっても *break* の状況をつくることはできないのである。

5　結　　語

本稿では *hit* 動詞が許す二つの交替形を取り上げ，それらを許す原因が動詞の意味的基盤に求められることを見た。

注

*本稿で用いたデータ収集にあたっては，専修大学佐藤弘明氏による Kwic On Gugle を利用した。ただし，この検索サイトは2003年9月末に一般の使用を停止している。オンラインで収集した例文には出典元の URL を添え，独立した文献リストにはしていない。URL は検索時に存在しているか，またはキャッシュとして保存されていたことを意味する。インターネット資料の性質上，将来の任意の時点で参照可能であることを保証するものではない。

参考文献

Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. University of Chicago Press.

Guerssel, Mohamed, Kenneth Hale, Mary Laughren, Beth Levin, and Josie White Eagle (1985) "A Cross-Linguistic Study of Transitivity Alternations," *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity, CLS* 21, Part 2, 48–63.

影山太郎（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版.

Langacker, Langacker (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford University Press.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. The University of Chicago Press.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*. MIT Press, Cambridge, MA.